何気ない日常

音羽中・1　白井　咲羽

私には八十歳のひいおばあちゃんがいる。ひいおばあちゃんはとても頑固だ。自分の気が済まないとその場から離れない。でも、そんなひいおばあちゃんが大好きだ。

ひいおばあちゃんは、私が生まれた時からずっと家にいて、隣にいた。小さいときは、朝から晩まで一日中遊んでいた。ひいおばあちゃんは買い物が大好きで、必ずランチをして帰ってくるほど活発だった。ひいおばあちゃんと同じ家に住んでいるという人をあまり聞いたことがなく、とても誇りに思っていた。昔の経験がないと聞けない太平洋戦争のことや、昔の暮らし、ためになる話を小さい頃から間近で聞き、教わってきた。私は聞いている時間が好きだった。今のことは全然記憶にないのに、昔の話なると淡々と話し始める。真剣に話すまなざしがいつ見ても格好よかった。自分の尊敬する人はひいおばあちゃんだった。

気づいたら、ひいおばあちゃんと話したり遊んだりすることが年々少なくなっていった。そして、私の中で一つストレスの種になるものが増えていった。それは学校に行くときも、帰ってくるときも必ずひいおばあちゃんが私に挨拶をすることだ。小学校低学年くらいまでは、

「おはよう。行ってきます。」

としっかり挨拶をしていた。でも、ひいおばあちゃんが九十歳、私が小学校四年生のころから挨拶をされることが正直嫌になった。その時から徐々に耳が遠くなり、声をはらないと聞こえなくなったのだ。朝から声をはるのはとても疲れるし、忙しいんだからいちいち言わせないでほしいと心の中で毎日のように思っていた。でも、心の中で終わっていればよかった。無視してしまったり、会わないようにしたりと、つい冷たい態度をとってしまった。人のことを気にせず自分勝手な行動をした。でも、まだ私は知らなかった。何気ない日常の大切さを。

事故が起こったのは、お正月のことだった。家族それぞれがまったりしていた時にドンと音がした。

「ひいおばあちゃんが転んだ。」

母の声を聞いて、私は階段へ走り出した。でも、すぐに立ちすくんでしまった。助けたいのに足が動かない。とても怖かった。自分が何かをしたところで邪魔になるだけだ。そんな気持ちが頭をよぎった。家族は応急処置をしたり、救急の電話をしたり、荷物をまとめたりと大忙しだった。そんな時にふと事故が起こる前のひいおばあちゃんの姿が浮かんだ。とても頑固だけどとても元気なひいおばあちゃん。心に刺さることをたまに言うひいおばあちゃん。「お米がこわい」と昔の言葉づかいを連発するひいおばあちゃん。自分はひいおばあちゃんにたくさんかわいがってもらい、たくさん助けてもらった。なのに、自分は助けてあげないなんて、あってはならない。助けなければ。そう決意を決めた時に父が私を呼んだ。その時に見たひいおばあちゃんの姿は今でも忘れない。大丈夫よと笑うひいおばあちゃんは、言葉とは真逆の姿だった。廊下に飛び散った血をぞうきんで拭いている間、穏やかに話すひいおばあちゃんのおかげで救急車がくるまで暗い気持ちにならずにすんだ。そして、救急車の中に運ばれていく姿が見えなくなるまで見届けた。冬の夜風はとても冷たく感じた。

救急車で運ばれた後、お風呂に入った。ひいおばあちゃんのほうが痛いしつらいのに、私のほうが涙が出そうになった。私が泣いたら余計につらくなると思い、泣かないように我慢していたのに、一人になったら突然感情があふれた。ひいおばあちゃんに対して冷たい態度をとっていたことをすごく後悔した。

午後十一時、ひいおばあちゃんが帰ってきた。いつもはこんなに遅くまで起きていないが、この日は寝たくても寝られなかった。玄関で待っていた私を見たひいおばあちゃんがにっこり笑って私の名前を呼んだ。その時すっと肩の荷が下りた感じがした。家族みんなに見守られて部屋に入っていった。その後ろ姿はとてもたくましく、かっこいい背中だった。前のように何も持たずにスタスタは歩けなくなったけど、手押し車や杖をつきながら歩けるようになった。そしてまた、毎日の挨拶をするようになった。嫌だったはずの挨拶が今では嫌ではなくなった。今は挨拶をしてくれることがうれしく、ありがたいと思うようになった。

日常はいつ崩れるかはわからない。けがにかかわらず、地震や事件に巻き込まれる可能性もある。でも、起きてしまったことは変えられない。そして何かあった後に「普通の生活」のありがたみをつくづく感じることができる。あたりまえの生活のを、大切にしていきたいと日々思う。

ひいおばあちゃんは今回のけがからくる不調が多く、頭が痛い、足が動かないと日々悪くなっていく。お別れする日まであと何年なのか、何か月なのかはわからない。でも、生きていることの幸せと何気なく過ごしている普段はあたりまえではないことを実感できた経験だった。ひいおばあちゃんが救急車で運ばれてから時間は経つが、生きていてよかったという思いは今後も私の胸に刻まれている。この経験を無駄にしないようにしたい。いつも過ごしている日常はあたりまえのようだが、あたりまえではない。ありがたい毎日だということを忘れずに過ごしていこうと思う。

私にとってひいおばあちゃんはあこがれの存在だ。ひいおばあちゃんも私を誇りに思ってくれるだろうか。今、遠出はできないが、昔みたいにお菓子を食べながらゆっくりと話をしたい。きっとひいおばあちゃんのまなざしは昔と変わらず、私の好きなまなざしだ。

これから先、いろいろな人に出会い、学んでいくだろう。悩むことや苦しいと思うこともきっとある。そんな時、笑顔を忘れず、この経験を胸に一歩ずつ前に進んでいきたい。普段の生活はあたりまえでないこと、だからこそ日々の生活を大切にしていかなければならないことを世の中の人と共有したい。そう思えたのは紛れもなく、唯一無二の私のひいおばあちゃんのおかげだ。

６・９